

今月
秀句

千島列島いつまでたつても冬景色

記者会見コケにされてる知る権利

白眞弓
中野林

忘れてはいけない

1910年3月1日、日本統治下の朝鮮半島で「独立運動」が起きた。真の友好関係を訴えた。日本は弾圧。多数の死傷者を出した。

3.1

あ、忘れていた

国際婦人デー。1908年3月8日、アメリカの婦人労働者の決起を記念した国際的な婦人解放運動の団結の日。カンボジアなど多くの国で祝日になっている。

3.8

忘れられない

2011年3月11日、津波による死者行方不明人は1万8千人を超え、津波は東電原発を襲う。数々の人災が明らかになった。

3.11

「森羅万象全て担当」と宣う総理。統計資料も官邸主導でやりくり。記者会見では答えず記者を攻撃。プーチンからはゼロ回答。安倍政権は戦後最悪の「悪夢」である。(周)

例会案内

3月例会 3月25日(月)
投稿締切 23日(土)
課題「丸」 3句以内
自由吟 5句以内
自選句、自解筆もぜひよろしく。

◆目次

川柳互選	2
課題吟「知」	3
自由吟	4
自選一連作	5
ほのぼの川柳	6
おたより	8
プロレタリア文学運動の盲点⑤	11
プロ運動と従軍作家	13
現代の落首大嘗祭考	16
シベリア抑留の記録⑤	17
故・秋山茂氏の手記	18
報告・後記	19

2月の 川柳互選

◆ 課題吟「知」

(互選) 一人3句以内吐

3	液晶の中で放言知識人	白眞弓	6	知る権利 骨抜きにする 確信犯	広助
2	未知の道何年たつても道半ば	未知子	6	国家的犯罪なんだと知る偽装	林
2	まず知ろうそして一步を踏み出そう	ダン吉	6	知恵出して 市民野党で アベ打倒	宏
2	五輪相 憲章すらも 知らぬ殿	宏	5	人類の英知詰まった第9条	徹乗
2	知らなんだ聖戦とだけ信じてた	ダン吉	5	アベ総理 悪知恵あれど 嘘八百	宏
2	悪知恵が長けて役人の出世道	立東爺	5	悪知恵に長けたサギ師の甘い罠 亀公子	立東爺
1	支持率のかさ上げ知るもノ一天気	一角	4	知恵者なり都合に合わせて忘れます	立東爺
1	知識なく知恵ない人の奸策は	未知子	4	六法を枕に無知と昼寝する	亀公子
1	アルカポネのほうが知的と白マフラー	白眞弓	4	悪知恵の統計いじりで政権維持	林
1	被災地に知恵集まって暮らし考え	和子	4	統計のでたらめ知ってやっぱりか	一角
1	うそつきめ英知で闘い腕まくる	和子	4	記者ハラで知る権利奪う安倍官邸	林
1	無知ひけらかす首相の顔はチンパンジー	徹乗	3	認知症カフエに笑いの常備薬	亀公子
	あべソーリ日本の根幹変えないで	未知子	3	心技体とつくに消した五輪相	一角
	そちの知恵統計不正抗議され	和子	3	知識あり知恵がないから珍答弁	立東爺
			3	AIは人知を越えてどこへ行く	未知子
			3	知らなんだ何度あなたは言いますか	ダン吉
			3	官僚の 英知国民 踏みつけに	広助
			3	坊ちゃんは庶民の声を感知せず	徹乗

6 戦争の 歴史知らない 改憲派 広助
 8 記者会見コケにされてる知る権利 白眞弓

◆自由吟 (互選) 一人5句以内吐

沖繩は県民投票全市町 一角

知るほどに頭を垂れる本土に住んでいる 立東爺

安倍読めぬ野党の意図がもどかしい 和子

さり気ない笑顔に少し温くなる ダン吉

総務省 厚労も又 民だまし 宏

レストランピザ食べようかサイフ見る 和子

ゴーンよりワイロが小さい元宮家 一角

あべソーリ九条壊してアィムソーリ 未知子

トランプに安倍担がれてなさけなや 和子

50万スーツ買い込み恨み買え 和子

明日のことわからないから手を上げる ダン吉

トランプを平和賞にとノータリン 一角

外交はAIに聴けばいかがですか? 未知子

厚労相口より先に手が動き 未知子

末筆に本音が添えてあるようだ ダン吉

8行を削ってニュース価値さがり 白眞弓

上出来の 不正統計 誰のため 広助

150万スーツ買い込み恨み買え 和子

政権は 女性活躍 ジェスチャーです 広助

豊かさに浸かり込む安倍用はない 和子

新自由 いじめの悲劇 格差から 広助

五輪相ごりん草なら似合うかも 未知子

癖のある人だが波長合っている ダン吉

積み立てた年金棄てる15兆 林

辺野古沖九十メートル杭ないが 一角

次の波待とうしつかり空仰ぐ ダン吉

人にまで進化しなくて安心お猿さん 立東爺

基地NO 県民投票 成功へ 宏

プーチンに串刺しされてるアベ野望 林

24日翁長の遺志が沸騰す 白眞弓

トランプに安倍担がれてなさけなや 和子

- 2 有権者を愚弄しているモノ男君 徹乗
- 2 プーチンに安倍担がれて島いずこ 和子
- 3 税上げて 兵器爆買 米のポチ 宏
- 3 逃げ得を地で行く人が上にいる 亀公子
- 3 生舞台桜田門内で立ち往生 立東爺
- 3 箝口令敷いても漏れてくる不正 亀公子
- 3 不祥事に 怒りが慣れて 後怖い 広助
- 3 平和ぶつ壊す大統領に賞推薦 徹乗
- 3 待機児童なくすと毎度口ばかり 徹乗
- 3 望月の叢雲分けるペン持つ手 白眞弓
- 4 付度を強要してるアベ独裁 林
- 4 アベ総理 トランプのポチ 露のカモに 宏
- 4 鶴の墓守って春のお寺さん 一角
- 4 役人が取りまく大臣席の脇 立東爺
- 4 官僚を手玉にほざく金バッチ 亀公子
- 4 虚偽偽装みな責任を部下のせい 亀公子
- 4 指折って赤紙刷る日数えてる 林
- 5 がっかりだと言う大臣にがっかりだ 徹乗

- 5 米のため奈落の底まで杭を打つ 立東爺
- 6 ノーベルも吹き出すトランプ平和賞 白眞弓
- 6 暴走を ゆるさぬ本気 沖縄だ 宏
- 6 辺野古海 軟弱地盤 税の杭 広助
- 6 大本営発表「賃金上昇中」 徹乗
- 6 付度で帳尻合わすいい家来 亀公子
- 8 千島列島いつまでたつても冬景色 林

今月の
自選・連作

◆自選句 前田大峰

表より裏を知ってる総理秘書
知る権利水で薄めて隠蔽し
オリンピック血を吸った日の丸振りまくり
天皇ショー象徴矢鱈に出る世紀末
国民の憎悪背負って税を上げ
凜として辺野古に揚がる反戦旗

辺野古から春一番が吹いて来た
原発セールス世界中の恥さらし

◆ 自選句 中野林

「ノーベル平和賞推薦」

世界から可笑しな奴だと嗤われる

補佐官に偽装させるか平和賞

ゴマすりが平和賞の橋渡し

右の者トランプをお守りする壁安倍の役

爆買いの兵器で祝砲「平和賞」

噴飯物「推薦する者される者」

春なのに世界凍らすアベノギャク

◆ 自選句 平野雅晴

深い闇やはり届かぬ 90米

省みて日記に見える我が幸よ

トランプを上に戴く花札か

安倍さまはさすがが故事つけ変えなざる

虐待を辞めて雛段祭り上げ

◆ 「ムカシコロッケ」三句 (岩原一角)

揚げ食べててのコロッケおもふ昭和の日 マッキー

コロッケを食べて幸せ現代は 一角

揚げたてのコロッケ手に頬緩む マッキー

マッキーさんは「昭和レトロな日」と記し

ました。きつと昭和50年代以降のイメージ

だろうと、これは一角の推察です。「今日

もコロッケ、明日もコロッケ」の記憶はあ

りません。

◆ ほのぼの川柳 《投句歓迎》

我が子たちヤンチャだけどかわいかな 神田 鯛

送迎は運転技術より心 神田 鯛

息子みて百歳までは生きねばと 真人 我

寄付すれば合格するよと東医科大 真人 我

子は育ち守るものなしすってんでん ひろ

死亡欄見て今日も元気にアルバイト ひろ



◆ 岩佐ダン吉さんより

お世話になります。ついに演劇、5月11日(土)、12日(日)に再演になりました。嬉しくも一

踏ん張りです。ご健勝を祈って。既に観てくれた仲間には感想と「ぜひ再演に一声」を、観ていない仲間には「あなたの為に再演が」と少し心に負担をかけつつ今度こそ。

今年の「碑前祭」4顕彰会で交流誌を編集したい。

《追》会報「和」、折れなし、無傷で届きました。ありがとうございます。「弾圧と拷問」「シベリア抑留…」、うん、うん、と読みました。田村さんの記事は読んだが、コピーは感謝。

◆ 岩原茂明さんより

・全日本川柳協会の「平成柳多留第21集」の選を無事終えることができました。皆さまのお蔭様と喜んでいます。

・選んだ句は時事吟を中心に若い気の漂うものです。いずれ日川協から発表があれば、ご案内します。なお石川県の投句者は25人で、全体の2%弱で人口比で考えると、まずまずの人数です。

・日川協の「平成柳多留第21集」の選に参加して思ったことです。「どいね原発」という、廃炉までやろうというスタンディングに毎週のように参加している私ですが、川柳は575の短詩だから、その句から作者の年齢を覗い知ることはできません。しかし、若い気が漂っている句、読んで元気が出る句というものがあります。自分もそこをめざしていきます。

◆ 寺内徹乗さんより

川柳は庶民の心情が吐露された唯一の文芸だと思えますので、鶴彬の生んだかほく市は哲学ばかりに力を入れていないで、川柳という媒体で戦争の歴史を学ぶ全国初の資料館を作ると画期的だなどと思いますが、道のりは長いです。

◆白眞弓さんより

今回は締め切りのころ、旅行中なので、早めに投句します。沖繩の投票が気になる週末ですね。

官邸記者クラブとか、もう全く戦争直前みたいです。地域の問題は、地方ばかりでなく、家族形態の変化と人口減少などでこちらも問題多いです。

◎高鶴礼子さんからおたより (抜粋紹介)

初めてメールさせていただきます。

私儀、「ノエマ・ノエシス」という川柳集団を主宰させていただいておりますので、高鶴礼子と申します。(縁あって、一九七七年に『鶴彬全集』を作ったいまつ社の大野進の最期を見届けさせていたただいた者で、時実新子と鶴彬を無二の川柳作家／表現者であると感じている人間です。)

貴社様会報を、いつもお送りくださいます、ありがとうございます。

周さんの「プロレタリア文学運動の盲点」ならびに故・秋山茂さんの「シベリア抑留の記録」のご連載を、毎号、大変興味深く拝読させていただいております。

◎立東爺から高鶴さんへ返信 (抜粋)

一般に鶴彬は「反戦川柳人」と形容されていますが、これには前から違和感がありました。鶴彬は反戦川柳人と呼ぶのはふさわしくない、もっと広く大きな短詩芸術家にふさわしい呼称を考えるべきではないか、などと思ってきました。

高鶴さんのメールに書かれていましたね。「時実新子と鶴彬を無二の川柳作家／表現者であると感じている」というご指摘に「我が意を得たり」と同感いたしました。

◎高鶴礼子さんより再メール (抜粋)

私の架蔵しております『和』誌は一九六〇年代の

ものでした。

通巻号数 63 ～ 69、71、73号の9冊で、刊行年は一九六六年12/10 ～ 一九六九年10/15、岡田一杜さんが「一」と名乗っておられる時代の貴誌です。

63号には「和川柳社同人」として、松田三呂、野村三角、由利一光、都栄、坂井つくづく子、須田斗木男、中山英一、前田大峯、長島すがめ、一叩人、原由友、服部やすお、浜民平、岡田一と各氏のお名前が挙げられています。寛さんのご存知の方々も、きつと、おられるかと思えます。

一九六七年12/10刊の67号には、卯辰山のふもとに住んでおられたという大峯さんのお宅で、鶴彬記念句会を例年通り開催したことが書かれており、同年10/23にはNHKのローカル放送で「反戦の歌」と題して鶴彬が紹介された旨の記載があり、なんだか嬉しくなっていました。

プロレタリア文学運動の盲点

⑤

プロ運動作家と従軍記者

周 立東爺

当時の文学は三つの潮流があり、その作家たちを確認しておこう。日本文学史の復習である。

① プロレタリア文学 平林初之輔・青野季吉・前田河広一郎・葉山嘉樹・中野重治・蔵原惟人・平林たい子・佐多稲子・黒島伝治・小林多喜二・徳永直・高見順・中野重治

② 新感覚派&芸術派 横光利一・川端康成・片岡鉄兵・今東光・中河与一・中村武羅夫・龍胆寺雄・川端康成・吉行エイスケ・堀辰雄・永井龍男・舟橋聖一・堀辰雄・永井龍男・井伏鱒二・小林秀雄・広津和郎・深田久弥・伊藤整

③ 既成作家 谷崎潤一郎・島崎藤村・永井荷風・志賀直哉・芥川龍之介

文壇を席卷していたプロ運動であるが、プロ運動作家が書く作品のテーマは、横暴な地主と小作、過酷な労働、農村の飢えと疲弊、失業者の群れ、過酷な軍隊内部などがほとんどのテーマである。

小林多喜二は友人に宛てた手紙に「プロレタリアは帝国主義的戦争に絶対反対しなければならぬ」「今これを知らなければならぬ。緊急なことだ」と問題提起し、「たゞ単に軍隊内の身分的な虐使を描いただけでは人道主義的な憤怒しか起すことが出来ない。その背後にあつて、軍隊自身を動かす帝国主義の機構、帝国主義戦争の根柢」と「帝国軍隊―財閥―国際関係―労働者」を描こう、と訴えているが、決定的に欠けていたのは侵略された側、被害国民の側に立った視点だったのではないか。

戦争の実態を描いたのは戦争反対をスローガンにしたプロ運動作家ではなく、皮肉にも戦争作戦

に記録者として従軍した作家達であった。従軍記者は監視の中、「戦争の一面」を書いた。

当時、中国の蒋介石政権は日本軍の南京での残虐行為（一九三七年十二月）を国際社会に訴えており、陸軍報道部（馬淵逸雄中佐ら）はこれに対抗するため、一九三八年三月、芥川賞を戦地で受賞して注目されていた火野葦平を報道班に抜擢、徐州作戦を「聖戦」として宣伝させた。軍の狙いは的中、戦意高揚に貢献したと云われる。同年九月には菊池寛、佐藤春夫、丹羽文雄、林芙美子ら流行作家が「ペン部隊」として漢口攻略戦に派遣されている。

この「ペン部隊」には決まりがあつた。火野の死後発見された日記によれば次の七点である。

第一、日本軍が負けているところを書いてはならない。皇軍は忠勇義烈、勇敢無比であつて、決して負けたり退却したりはしないのである。

第二、戦争の暗黒面を書いてはならない。

第三、戦っている敵は憎憎しくいやらしく書かね

ばならなかった。味方はすべて立派で、敵はすべて鬼畜でなければならぬ。

第四、作戦の全貌を書くことを許さない。兵隊のせまい身辺の動きは書いても、作戦全体は機密に属しているから、スケールというものは出て来ない。

第五、部隊の編成と部隊名を書かせない。

第六、軍人の人間としての表現を許さない。分隊長以下の兵隊はいくらか性格描写ができるが、小隊長以上は、全部、人格高潔、沈着勇敢に書かねばならない。

第七、女のことを書かせない。

こうした侵略戦争へ急傾斜する流れの中で「戦意高揚」とは別に戦争を描いていたのは短詩の世界であった。文壇などの世界とは離れ、小さな冊子で発行されたためであろう、特高の目も届かなかったのかもしれない。

鶴彬は井上剣花坊亡き後、信子を助け柳樽寺川柳会『川柳人』誌を中心に創作を続けていく。よく知られていることだが、鶴彬が特高警察に逮捕されるのは、川柳仲間からの告発であった。

川柳誌『三味線草』（S12年9月・89号）が弾劾告発文を発表。翌月号に川上三太郎が「反逆川柳を排撃す」と題して「川柳は諷刺詩であるが、断じて反逆詩ではない」と書き、『川柳人』誌を発行主宰する井上信子を告発。同年十二月、井上信子や鶴彬、他に同人が一斉に検挙拘留された（信子は高齢をもって拘留を免れている）。

昨年、ある書物が出版された。『十七字の戦争』（田村義彦2018.9かもがわ出版）で、「川柳誌から見た太平洋戦争と庶民の暮らし」と副題がある。著者の田村氏が今年一月、東京新聞（中日新聞・夕刊）に二十回の連載をしている（川柳で知る戦争とくらし）。直接的に戦争現場を描いていないが、戦時下の暮らしが伝わってくる。（つづく）

現代の落首

——大嘗祭考——

周立東爺

(前承)

さて、ここに二つの「霊」が登場した。神と呼びかえてもいい。古代の民俗、宗教を研究する吉野裕子は指摘する。

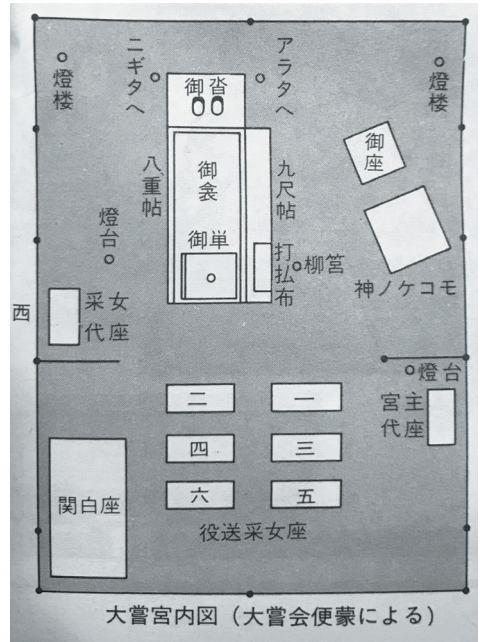
「祭祀終了後の「直食」は日本の祭式の定式であるが、祭祀進行中における祭祀者の神饌しんせんの供食は重大である。つまり、祭祀者が神饌を摂るということは、とりもなおさず祭祀者が同時に被祭祀者、即ち神であることを示しているものにほかならないからである」(「大嘗祭・天皇即位式の構造」弘文堂)

戦前、軍国主義教育の中では天皇は現人神であると教えたように、天皇は神と同一なのである。いわゆる現人神が天皇の本質である。しかし「現

人神」は神の名前ではない。逆に神の名が「天皇」である。前天皇の死去により皇太子が即位し「(半)天皇」になり、その後「天皇という神」になる儀式が大嘗祭である。この点が国会でも議論にならなければならなかったのである。単に宗教色が強いということだけではすまされない。

では天皇という神は何者か。また大嘗祭のどの瞬間に神となるのか。大嘗祭の進行を過去の文献にたよって子細に追究することになるのだが、古典の中で、この大祭の神についての記述は『令義解』職員令中の神祇官じんぎかんの条と神祇令中の即位の条の二カ条のみであるという。また『宮主秘事口伝』に「大嘗会者、神膳之供進第一之大事也。秘事也」とあるように一番重要なところが秘密にされ、口伝により執り行われた。

前述の田中初夫は、その神は「天神地祇・天照



大嘗祭の中心は御衾 (ベッド)

大神・天皇」の三位一体神と推定する。吉野裕子は田中説を踏まえ、古代の政治や習慣を律していた中国からの陰陽五行思想、伊勢神宮の伝承、古代からの琉球王朝、中国、朝鮮などの即位の研究から、田中説の天神地祇を中国古代の全宇宙の絶対神「太一」とする。「太一」は北極星のことである。

古代において、北極星と北斗七星は絶対的な指針であった。北斗七星は北極星を乗せる船である。大嘗祭で天皇が着る着物の背には七つの星が描か

れている。つまり大嘗祭で天皇は、北極星(太一)・天照大神・天皇霊の三位一体の神を体内に取り入れ、自身が三位一体の神・天皇になるのである。

大嘗祭の為に特別に総檜づくりの大嘗宮が建造される。その中心は、意外にも御衾と呼ばれる寝室である。布団、御坂枕と称する枕、畳が八枚重ねられたベッドなどがおかれている。何故、大嘗祭の中心が寝室なのか。

一般的には降りてきた神が疲れを癒すのにこのベッドで仮眠をするのだとの解釈がある。しかしこれは戴けない。余りにも大がかりな儀式に、仮眠などというものは似合わない。神が起きているうちに「仕事」をしてもらわなければならないからである。実は、これ以上は文字に出来ない理由がある。様々な研究、資料があるが明確に文字にしてあるものはない。しかし容易に推定出来るのである。(つづく)

シベリア抑留の記録

⑤

「在ソ三年 生と死のドラマ」

故・秋山茂の手記

前回までのあらすじ

一九四五年十二月、国境の町・満州里からソ連に入った。それから三日、満目白一色の荒野を走った。小さな駅に到着。満州から満載された何十輛の貨車から「占領物資」を百米離れた倉庫に運ぶ。列車は走り出す。寒さが一層厳しくなる。海のような湖を見えはじめ、湖岸を西に走る。岸辺に打ち寄せる波は海と見間違うほど大きく、砂礫の岸と濃緑の湖面には大小いくつかの島。汽船らしい船が列車と逆に移動していく。一幅の絵である。

第三章

抑留

列車がバイカル湖畔を走った日の午後四時頃だったろうか、列車が丘の下の引き込み線のような処に入って停まったと思う間もなく、俄に車外

が騒がしく、雪を踏みしめながらソ連兵が走り廻り小雪もちらつきはじめた。夕方のような気配でよく見ると線路近くまで丘陵がせまり出している為、それから先は見へず反対側の線路は幅広く貨車が時々入れ替え機関車らしい汽笛が聞こえて来るから相当大きな駅であることは間違いない。

イルクツク市に到着 その寒さに驚いた

下車してからこゝがイルクツク市であること知らされたが驚いたのはその寒さである。在満十五年寒さには或る程度自信のあった私だが、この寒さは牡丹江や佳木斯の比ではなく日本軍の防寒靴や被服は通用しそうにない。ソ連兵の少佐以下四、五名の将校が永い時間を掛けて人員を点呼し、われわれはソ連軍のコルキンという大尉の後について収容所まで約六キロの道、といっても丘の上の人家の疎らな農道を歩き始めたが出発の直前ソ連軍のトラック二輛が来て「荷物はトラック

が収容所まで運んでおく」というのでみんな背囊や手製のおおきなリュックをトラックに頼んだ。

私達の小隊はチタでの若い経験から各自が背負って歩いた。め盗られずに済んだが、荷物を積んだトラックは再び収容所に現れなかった。

歩いている間にも鼻毛が凍り防寒帽のおろしたたれの周りは真つ白く手の先は寒いというより痛い感じである。われわれは細い雪道を一時間余り掛かって街外れに周りを鉄条網でかためた四隅に望楼があり一辺の長さが三百米近い広大な四角形の地域の中に幾棟もある半地下式の一棟に入った。

第四章 労働大隊（オーエルベ）での作業

満州からシベリヤ方面に送られた日本人の捕虜（註：ソ連側は五十万人とい、日本側は七十万人と発表）は一般大隊と労働大隊とに区分され一口に捕虜といっても一様ではない。一般大隊という

のは関東軍及び朝鮮軍の一部と終戦時、北支より満州に移動して来た現役部隊が主であって一定の収容所（ラーゲル）に起居しながらソ連の一般作業場や建設現場又は農場などに就労していた。労働大隊はオーエルベと言われ比較的戦犯色の濃いと見られた満州国軍日系将校、協和会職員、満州国官吏、警察官軍報道班、新聞記者、教育者、宗教家、満航など特殊会社々員に、一部の在郷軍人である市民開拓義勇者、少年団員などに僅かな現役兵が加わった混合部隊で、各人の経歴は勿論年齢的体力的などに大きな開きがあつて、作業は何れもソ連極東軍の直轄であつた。

だから労働大隊には定住する収容所はなく、稀に収容所に入ることがあつても夫れは飽くまで仮住まいで大部分は天幕ぐらしであつたし、永い冬の間は定まったように山奥で幕舎生活をしながら伐採生活に追い使われ、白樺の若葉が風に揺れる頃ともなれば下山し、都市周辺に仮住まいして軍

用建築物や煉瓦工場などに就労し、秋風が肌を刺す頃山に入るといふ状態で、作業も厳しく、患者や死亡者も多かった。

われわれの伐採により「極東軍の向こう十年間の燃料が出来た」とチャソボーイ（警戒兵）が語っていたが寒気と過労と栄養失調で痛めつけられた体が春の訪れと共に下山し、漸く快復ししかけたと思う頃、又入山伐採作業という繰り返しは体力の弱い者から消えて逝くしか道はなかった。

結城喜吉（宇津宮市出身）が逝った

「この次は誰だろう」と頭をよぎる

入ソした翌年の二月下旬、私の分隊の結城喜吉という（宇津宮市出身）召集兵がアンガラ河上流パンキーの山中の幕舎内で眠るように死んで逝った。彼が死亡した前夜、

「俺が死んでも子供にシベリヤで死んだんだなんて言わないで呉れよ」

「馬鹿なこと云うな！ みんな死んでなるかと頑

張っているんじゃないか」

「夫れはそうだけど……」

この会話を最後に栄養失調のため永眠の眠りに就いたのである。

然し火葬をソ連軍が認めないため、谷間を距てた向かい側の山の中腹に埋葬することになったが、極寒の最中、大地は何処も岩石のように凍結し鶴嘴は空しくカンカンと跳ね返り僅かの土塊をとばすだけである。

一日の作業を免ぜられた分隊員は総動員で巨大な火柱が立つほどの焚き火をした後、残り火をはねて穴を掘るが夫れでも十センチ程しか掘れない。又焚き火、又掘る、何回も繰り返し漸く一人が入る位の穴が掘れたので、よその中隊の中に居た坊さん出身の兵隊に来てもらい一同最期の別れを告げ埋葬に移った時、「この次は誰だろう」といふ思いが頭をよぎったのは私だけではなかったらしい。

（つづく）

編集後記を兼ねて

◆前月号から会報発送に宅配メール便を利用してあります。それまで半折していましたが某NPOの協力で大きな封筒になり、中日新聞に連載されていた田村義彦氏のコピーを同封することが出来ました。◆この原稿の元になった『十七字の戦争』（かもがわ出版・18年9月）に川柳集団「ノエマ・ノエシス」の高鶴礼子さんが関わっておられ、「同書にご注目くださっているのを拝して嬉しくなった」

3月例会のご案内（毎月第4月曜日）

◆3月25日（月） ◆ \times 切：23日（土）

◆課題「丸」 3句以内 ◆自由吟：5句以内

◆自選吟、連作、エッセイ、川柳論、ご意見などもお寄せ下さい。◆会場：金沢市金石町にて

◆句報を持参下さい。例会で話し合います。

●投稿 FAX(076) 254-0762

●メールアドレスは下段に。

郵送は
下段住所へ。

との挨拶のメールを頂戴しました（7頁にメールの往復を紹介）。◆注目された沖縄の県民投票は圧倒的な辺野古基地建設反対の意志を示しました。沖縄の辛さを知るにつけ安倍政権の退陣を実現しなければと。◆今年「選挙の年」。川柳でどう訴えるか、社会をどう描くか。◆1910年3月1日、日本統治下の朝鮮半島で「独立運動」が起き「真の友好関係」を訴えた。集会参加者約202万人、死傷者が7千5百名、負傷者が1万6千名。日韓、日朝問題の底流でもあります。◆三月五日、「鶴

杉を顕彰する会」の角島広治さんの訃報が届きました。長年、会報『はばたき』誌の編集を引き受けておられた元新聞記者さん。ご冥福をお祈り致します。葬儀に参加してきます。（編集子）

和川柳社 〒920-0335 金沢市金石東2丁目15-30（渡辺 寛）

電話 FAX：076-254-0762 PC-mail：kananabe@popolo.org

携帯：090-9445-1302 携帯 mail：kan-wata@i.softbank.jp

振込先：北國銀行中央市場支店 #191 普通 640「和川柳社」

発送に協力いただいています。

◆《食育のグリーンノート&土の音工房・上村彰》◆オカリナ制作